

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2019 春 vol.131

特集

琵琶湖博物館 第2期リニューアル!



新撰 淡海木間撰 75

縄文時代のスギ埋没木

INFORMATION STATION 催し案内 2019 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内



特集

琵琶湖博物館 第2期リニューアル!

「おとなのディスカバリー」(次ページ平面図のFの位置から)。奥が質問コーナー、さらに奥がオープンラボ

滋賀県立琵琶湖博物館では、第2期リニューアルとして大人向けの展示体験室「おとなのディスカバリー」とコーナーの多くを一新した「ディスカバリールーム」が昨年7月に、木々の中を琵琶湖のそばまで歩ける空中遊歩道「樹冠トレイル」が11月にオープンしました。

担当学芸員の林竜馬さん、榊永一宏さん、中村久美子さんに、それぞれの展示についてお聞きしました。



■滋賀県立琵琶湖博物館

住 所 草津市下物町1091

連絡先 TEL 077 (568) 4811 FAX 077 (568) 4850

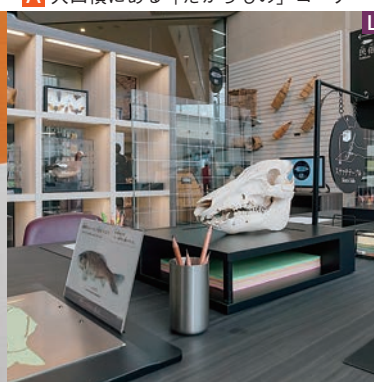
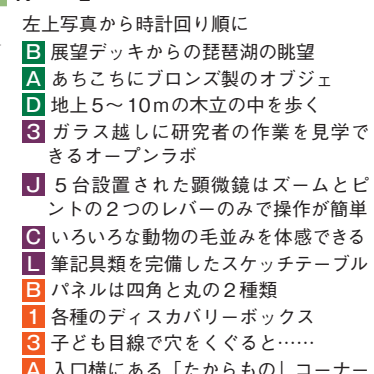
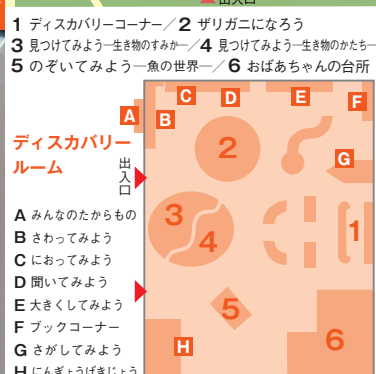
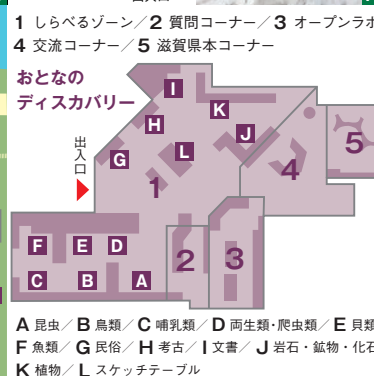
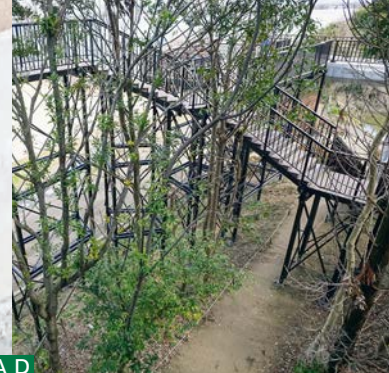
観覧料 常設展示：一般750円、高・大学生400円、小・中学生 無料
※企画展示をご覧になるには別途料金が必要です。

アクセス JR草津駅西口から近江鉄道バス「びわこ博物館」行きで「びわこ博物館」下車／名神栗東ICから車で約30分

取材／編集部 写真／辻村耕司



新コーナーが誕生した
ディスカバリールーム
(次ページ平面図の3)



「樹冠トレイル」について

琵琶湖の風を感じていただきながら
森にいる動植物の魅力を
お伝えできたらと思っています。

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員 林 竜馬さん

「11月のオープンしてすぐの頃、コゲラという小さいキツツキの仲間がトレイルから3mぐらい先の枝に留まって、ドラミングしているようすが見られました。夏には、アオスジアゲハがたくさん飛ぶと思います。幼虫がタブノキなどの葉っぱを食べるアゲハチョウの仲間です」

植物・自然観察と琵琶湖の眺望が2大コンセプトです。

— 林さんのご専門は、花粉の化石をもとに昔の植生を復元することだそうですが、なぜ樹冠トレイルを担当なさったのですか。

林 当館では屋外展示として森がつくられているのですが、そこはただの公園ではなくて、過去の琵琶湖の森を復元しようという目的でつくられており、「縄文・弥生の森」と呼んできました。樹冠トレイルが設置された森は、B展示室で紹介している縄文人が暮らしていた時代の琵琶湖の周りを再現している森なんです。

ですから、私が専門の過去の森を復元し、どういう生態系だったのかを探索する研究に屋

外の森はすくうってつけなんです。植物の花粉が採れますし、どういう育ち方をするか、季節ごとにどういう実をつけるか、化石だけからは見えてこない植物の営みを観察できますから。

— なるほど。樹冠トレイルをつくる計画はいつ始まったのですか。

林 第一期リニューアルの3年前から議論を始めました。館周辺の屋外をもっと活用するための展示をつくろうということになって、学芸員によるワーキンググループでアイデアを出し合いました。ヨシ原の中を歩ける歩道をつくるという案もありまし

たね。最終的に具体化したのが、森の中の空中遊歩道、この樹冠トレイルでした。

— 東近江市の河辺いきもの森にも、林冠トレイルという設備がありますね。

林 あそこ以外にも大阪の万博記念公園にはもっと長い距離を歩ける空中観察路があります。それらも参考にしましたが、当館には、もう一つ、琵琶湖にもっと近づいてもらおうというコンセプトがありました。せっかく琵琶湖のすぐそばまで来ていながら、入館者の中で湖畔まで出ていく人はごくわずかだったんです。それではもったいない。間近で琵琶湖を眺めてほしい、琵琶湖の風を感じてほしいと。

— 植物の林さんのご担当だということも



プロフィール

はやし・りょうま／1981年、東京都生まれ。2012年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。専門は古微生物学。

あつて、風景を眺める点はアビールしていいものなのかと思っていたのですが、林 植物・自然観察と琵琶湖の眺望、これ

本物の丸子船を、3Dスキャナーでスキャンしたんですよ。

——完成までにどのような苦労があったのですか。

林 何もない更地につくるのであれば、工事車両の出入りや建設も簡単なのですが、すでに森が出来上がっていて、その隣には生態観察池という池があったので大変でした。この池はマイクロアクアリウムの餌を採ったり、プランクトンを観察する非常に貴重な場なんです。

——きわつきの位置につくったわけですね。

林 設計段階からいろいろせめぎ合いがあつて。もう少し広い道がないとダンブが入れないというので、最終的には設計業者さんがネットに砂利を入れたものをたくさん池に敷いて道を少し拡張するという裏技を考えてくださいました。

それから、メインの丸子舟トレイル（長さ約63・5m）を支える3本柱は約30m間隔で杭が打つてあるのですが、この辺は埋め立て地なので、ボーリング作業をする、大きな礫がゴロゴロある状態でした。何度か作業がストップしながらも業者の人が手を替え品を替えやってくれて、雪の降るなか、「また石にぶつかった。もう駄目だ。

が2大コンセプトです。じつは、話す相手、話す場によって、どちらを強調するかを変えているのですが、両方大事です。

——完成までにどのような苦労があったのですか。

林 工期が間に合わない「みたいな話をずっとして。規模は小さいですが、ほんとに映画『黒部の太陽』みたいでした（苦笑）。ようやく形になったと思ったら、9月4日、最後の最後に森が台風21号の被害を受けたんです。事務の方でがんばってくさって補正予算が取れたので、木を補植したり、倒れた木を起こしたりできました。

——丸子船の形をした遊歩道のデザインは、どのように決まったのですか。

林 詳細設計をする段階で、博物館のシンボルになるモチーフの形にすることになって、アザラシ、ナマズなどの案もあった中、最終的に琵琶湖に船出していく丸子船のイメージが展望デッキにつながる歩道のモチーフに決まりました。実際にB展示室にある本物の丸子船を、業者さんが3Dスキャナーでスキャンしたんですよ。

こだわってやってくださった設計業者さんで、へさきの部分の角度なども3Dスキャナーのデータからかなり実物寄りに再現されています。浮力を稼ぐために丸子船の側面についている、スギなどの丸太を半分に切った「おも木」にあたる部分もありますし、トレイルの入口にある三角形の構造物も、船の後部にある「とびのお」と呼ばれる特徴的な部材を再現したものなんです。

——歩いていると、いくつもの解説パネルとオブジェに出会いますね。

林 設計段階から考えていたものです。解説パネルは8枚あつて、「はしかけ」の方と「森人」というグルー

プを立ち上げて、一緒に写真を撮ったりしながら製作しました。学芸員の視点でつくる解説パネルではなく、ユーザー目線で作っています。

ブロンズ製のオブジェは、第1期リニューアルのマイクロアクアリウムでもお世話になった成安造形大学の宇野君平准教授とお知り合いの鋳物職人さんに協力いただき、学生たちがデザインした作品です。

——今後は、どんな木が増えるイメージですか。

林 木が大きくなって、理想的には森になつてほしいんですよ。公園ではなくて、いまはまだ明るい感じですけど、やがて大きくなった木々が空間や光を奪い合います。すると、だんだん暗くなって、暗いところじゃないと生えないような木がどんどん育っていきます。種から大きくなった稚樹や低木が少しずつ育つて、それらが自然に世代交代して、どんどん生態系を維持し続ける森のシステムができてほしいです。

——何年かかるのですか。

林 まあ100年ぐらいかな。理想の話です。でも、もう開館から20年ぐらいたっているわけですから。

——現時点では、ガイド役にあたる方はおられず、来館者が自由に行き来するのただけなのですか。

林 これまでに3回、「森人」の方とガイドツアーをやりました。もっと定期的に樹冠トレイルツアーとして開催したいと思っています。それと、「森人ガイドブック」というパンフも製作しました。これから森にいる動植物の魅力を

お伝えできたらと思っています。



「おとなのデイスカバリー」について

研究のための標本をつくる作業など、
本当におもしろい部分を見ていただきたい
昆虫
という思いがありました。

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員 榎永一宏さん

「昆虫の多くは標本箱に入っていますが、とくに珍しい種類などはアクリル製の密閉ケースに入っており、両側から見るができます」

ハエの国際学会に出席したことがきっかけです。

榎永さんのご専門はハエですね。

榎永 そうです。大きく言うと昆虫学なんですけど、その中でアシナガバエというハエの分類や進化について研究しています。

——どういった経緯で「おとなのデイスカバリー」の担当になられたのですか。

榎永 大きくは第2期の交流空間全体を統括しているのですが、「おとなのデイスカバリー」というアイデアの元をたどると、2002年にオーストラリアのブリスベンで行われたハエの国際学会（双翅目昆虫会そうしもく議）に出席したことがきっかけなんです。その帰りに立ち寄ったシドニーにある博物

館で、館内にコアラの剥製はくせいや恐竜の化石などを自由に触れる部屋があったんです。それも子ども向けという感じではなくて、大人でも十分楽しめるすごく感じのよい雰囲気だったので、うちの館にも、こういう部屋があったらいいなと思いました。

当時は、館のオープンからまだ10年もたっておらず、リニューアル予算もなかったの
で、ハエの調査で世界を回りながら、いずれ機会があればなと考えていました。アメリカのシカゴにあるフィールド自然史博物館へ行ったら、恐竜化石のクリーニング作業を実際に見せる部屋を見学したりしながら、

——普通は見えない裏側、バックヤードを表に出すという試みですね。

榎永 入館者としてそれを楽しめましたし、学芸員としてつねづね感じていたのは、博物館というのは表で見えている展示の部分はほんの少しだということです。見えていない部分である収蔵庫や、クリーニングして標本をつくる作業や、それをもとに研究して展示に至る前段階が僕らとしては一番おもしろい部分なんです。一般的な博物館の展示ではなかなかお伝えしにくい、その本当におもしろい部分を見ていただきたいという思いがありました。

——オープンラボというコーナーは、まさにその前段階を見せる場所ですね。



プロフィール

ますなが かずひろ／1970年、大阪府生まれ。2000年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。専門は水生昆虫学。

榎永 僕も昆虫標本の作業は来館者に見てもらいながら、ここでしょうと思っていま

す。みんな恥ずかしがって行きたくないだろうという意見も出ましたが、先ほどのフィールド自然史博物館で聞き取りをする、ボランティアの人はそうした作業ができることをとても喜んでおられました。当館でも若手の学芸員は結構楽しんでやってくれているようです。気をつけたのは、オーブンラボが快適だと思ってもらえることです。この部屋は、ちゃんと空調管理ができるようにして夏でも冬でも快適です。

——**他のコーナーは、どういうふうに組み立てていかれたんですか。**

榎永 すでにマイクロアクアリウムがある微生物関係は除いて、分野ごとに何ができるかを考えてもらいました。人文系もふくめて11分野あります。基本としたのは、写真やパネルではなく、実物、本物の資料を出してもらうことです。これらが博物館の土台であるということを入館者に見ていただくとしています。

——**第1期リニューアルでC展示室の生き物コレクションにもたくさん標本が登場しましたが、あちらとの違いは。**

榎永 あちらは展示室なので一方方向からしか見えないんです。ここでは上下左右どち

また、博物館とともにさまざまな活動を行っている「はしかけ」グループが、ミーティングや剥製のスケッチなどで利用しています。そうした活動の「見える化」が「はしかけ」という制度の広報にもなっています。当館関係者以外でも利用いただけるので、いつでもお申し込みを受け付けています。ただし、火気の使用と飲食だけは禁止です。スケジュール表に名前を書いていただいて、あとは、ガラスの向こうのお客さんがマイクで質問してきたら、答えてくださいとお願ひしています。

——**子どももウェルカムなんです。**

らの方向からでも見て、触れて質感まで感じてもらえます。リニューアルして間もない昨年の夏休みに来館なさった4人家族が、机にメジロの剥製を持ってきて、4人それぞれ別の方向からスケッチしていたんです。まさにそれが僕のしてほしかったことで、その姿をたまたま見かけてとてもうれしかったのを覚えています。

——**いろいろな哺乳類の毛皮をさわれるコーナーもありますね。**

榎永 あの毛皮や哺乳類の剥製は、集めるのが結構大変だったんです。朝早くに車で走っていると落ちてくるんですよ。いわゆるロードキルにあった死体が。車にビニール袋と手袋を常備していて、見つけたら拾って持って帰っていました。カラスと奪い合いになったりしながら（笑）。それを、博物館にあるマイナス30℃の冷凍庫で保存し、剥製づくりの業者さんへも僕が直接持っていきました。

その作業のようすをびわ湖放送さんに撮影していただき、解説ビデオとして流しています。タ

ヌギ、モグラ、キジ、カワセミ、スッポン、コイの6種類で、通常、展示室で流すビデオの長さは3分が限度なのですが、このビデオは10分あります。入館者が腰を落着けて視聴できる空間でもあるので、終わるまで見てくださる方もけっこういて喜んでます。

——**昆虫のコーナーなどは子どもでも食いつく子が多そうですね。**

榎永 そうなんです。好きな子は本当によく知っています。「おとなの」とついていますが、もちろん子どももウェルカムなんです。自分自身、親や年上の兄弟のマネをして、学んでいくことも多かったので、10代の子たちがちよつと背伸びして利用する学びの場にもなっていると思います。

シックな大人の感じの場所になっているからか、子どもたちも標本類を大事に扱ってくれています。オープン前は破損や盗難を心配しましたが、8カ月たって、それほど問題にはなってはいません。

——**来るなら平日狙いがよいでしょうか。**

榎永 そうですね。この部屋はできるだけじっくり見ていただきたいので。ただ、最初にここへ入ると滞在時間が長くなりすぎて、他の展示室に行く時間がなかったという人もおられます。逆に他を回ってきてから最後に入ると、時間がたりない。一番いいのはくり返し利用していただくことです。自分の採集物を持ってきて調べてもらってもいいですし、標本をつくってもらうのは大歓迎です。

——**それを発表するスペースもありますね。**

榎永 はい。今は特別研究員の撮影した鳥の映像が流れている交流コーナーを利用していたことも可能です。最終的には、そういうサイクルでこの部屋を利用していただく人が増えてほしいと思っています。

ディスカバリールームのリニューアルについて 大人と子どものやりとりを 増やす工夫をしています。

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員 中村久美子さん

どのようにリニューアル作業は進んだのですか。

中村 主が私で、副担当が妹尾裕介学芸員（考古学）、現場の嘱託の職員2人の4人でいろいろ相談しながらやりました。リニューアルした部分の言葉の表現や漢字などについては、小学校教諭の奥野知之さんに指導していただきました。

ディスカバリールームはともりピーターの方が多い部屋で、開館当時の子ども世代が、いま親世代になりつつあります。そこで、事前に「お気に入りコーナーはどこですか」というアンケートをしました。その結果、ザリガニは不動の人気で、「おぼあちゃんの家」も人気が高く、ほぼそのまま残しました。世界の楽器に触れる「音の部屋」も人気が高かったのですが、そのまま残すのが難しく、生き物が出す音のしぐみのコーナーをつくり、楽器の一部はディスカバリーボックスに入れました。

人気のあるものは残しつつ、新たなコーナーを考えたわけですね。

プロフィール

なかむら・くみこ／1982年、兵庫県生まれ。2011年より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。専門は博物館学。

中村 怖がってくぐれない子も、友達があれば、キャラクター言いながら最終的にはくぐってくれるものなんです。上にいることに気づかず通って、「上を見て」って言ったら、「おっ」って驚く子とか。

特にあそこは見る人の背丈ごとに、テーブルの高さ、トンネルの中の高さ、車いすの通れる部分の高さなどを細かく検討しました。大人が抱っこしてあげないと、見えない位置に

あそこのキツネなどは、怖がる子がいませんか。

中村 怖がってくぐれない子も、友達があれば、キャラクター言いながら最終的にはくぐってくれるものなんです。上にいることに気づかず通って、「上を見て」って言ったら、「おっ」って驚く子とか。

入口横の「みんなのたからもの」は？

中村 初めて展示室の外にコーナーを作りました。外に行って自分の好きなものを探して、集めて、調べるという学芸員の仕事、子どもの頃に公園や庭で気に入ったものを拾ってきて箱や缶の中にコレクションしたのと基本は変わりません。そこから学芸員という仕事を知ってもらう意味もあります。

中村 次に対象年齢を決める議論をしました。類似の施設がある他の館を参照しながら、当館の場合、小学校1・2年生をメインのターゲットにしようと決めました。実際は未就学の子の利用も多いので、それも無視しないという前提で。加えた一つ目は、五感を使える展示です。これまで手で触る、匂いを嗅ぐ、コーナーがなかったのです。

もう一つは、実物（剥製類）を増やしました。先ほどのアンケートとは別に、保護者を対象に聞き取り調査を行ったところ、「本物をたくさん見せてあげたい」という回答が多かったですね。それは、こちらも考えていたことで、「ああ間違っていないかったんだな」と。これまではハンズオン（手で触れる）というコンセプトもあってレブリカが多かったのですが、子どもの目線にあえて本物の剥製を使いました。

中村 次に対象年齢を決める議論をしました。類似の施設がある他の館を参照しながら、当館の場合、小学校1・2年生をメインのターゲットにしようと決めました。実際は未就学の子の利用も多いので、それも無視しないという前提で。加えた一つ目は、五感を使える展示です。これまで手で触る、匂いを嗅ぐ、コーナーがなかったのです。

ディスカバリールームⅡ「子ども部屋」というイメージがあったので、親は休憩しながら、子どもが楽しんでいるのを遠目に見るみたいな利用が多かったのですが、大人と子どもと一緒にコーナーを巡りながら、それぞれ「こんながあるよ」と教え合いつつしてもらう姿をめざしたつもりです。

「英語の名称部分は、大勢の方に協力していただいた人文字でできています」

縄文時代のスギ埋没木

滋賀県立琵琶湖博物館 林 竜馬

2018年11月に琵琶湖博物館に新しく造られた空中遊歩道「樹冠トレイル」は、屋外展示の「縄文・弥生の森」の中に建っています。この森は、人が自然に大きく手を入れる前の原生的な植生を再現しています。神社やお寺の周囲に残された社寺林と呼ばれる植生や、琵琶湖の周りから見つかるさまざまな植物の化石を参考にして、縄文時代や弥生時代の森を復元しています。

今回紹介する資料は、「縄文・弥生の森」の復元に一役かった大きな木の化石です。この大きな根株は、1992年に大津市木戸にある木戸小学校の工事の際に地中から大量に掘り出された埋没木のうちの一つです。今から約3000年前に生きていた針葉樹、スギの埋没木で、その幹直径は1m以上、根ばりは3m以上あります。琵琶湖の周りでは、穴太遺跡や余呉湖周辺の低地などでも、このような巨木の埋没木が見つっています。地層の中に眠る巨木が、私たちに太古の森の記憶を語りかけてくれるのです。

縄文時代の人々は、このような巨木のスギの森を見つめながら、琵琶湖の周りで暮らしていました。当時から、スギを木材として利用していたことも、考古学の研究成果から明らかになっています。滋賀県における縄文時代の遺跡からは、丸木舟と呼ばれるボートが30艘近く発見されています。丸木舟は、大きな丸太をくりぬいて作ら

れたもので、古くから人々が湖や川に漕ぎ出すのに欠かせない道具でした。



滋賀県で出土し

た丸木舟の材料となる樹木は、その約半数をスギが占めていたことが樹種同定の結果から示されています。縄文時代の人々は、この埋没木資料のようなスギを伐採して、丸木舟をはじめとしたさまざまな道具を作っていたのです。

2020年にリニューアルオープンする琵琶湖博物館のB展示室では、琵琶湖と森で暮らした縄文時代の人々の生活について、実物資料と等身大ジオラマで紹介する展示コーナーができます。

その中で、遺跡から発掘された丸木舟の実物標本とともに、このスギの埋没木も展示する予定です。また、屋外展示の一角には、今回の資料と同じ場所で見つかった、より大きなスギの根株も展示していますので、一度探してみてください。



細川正廣氏が滋賀県立陶芸の森に寄贈された滋賀ゆかりの古陶磁コレクションです。本展では、〈細川正廣コレクション〉111点の中から、焼餅焼、湖東焼、小富士焼、信楽焼、梅林焼、八田焼、圓山湖東焼、門平焼など約40点を選び、紹介します。



右上…門平焼（大津）
左上…長浜湖東焼（長浜）
下…湖東焼（彦根）

入館料：一般500円、高大生380円、中学生以下・滋賀県在住65歳以上の方無料

休館日：月曜日（4月29日（月・祝）と5月6日（月・振）は開館し、5月7日（火）は振替休館）

お問い合わせ先：TEL 0748 (83) 0909

春季特別展

安土—信長の城と城下町—

4月27日（土）～ 6月9日（日）
滋賀県立安土城考古博物館



（個人蔵）江州蒲生郡豊浦村と須田村山論立会絵図

信長が築いた安土城とその城下町は、築城当時にはその華麗さ豪壮さで人々を驚かせ、これまでの城や町のあり方を大きく転換させたとして注目を浴びています。しかし、当時の記録や絵画資料が少ないため、具体的な姿は十分に明らかになっていません。本展では、これまでの発掘調査や文献調査で、城と城下町について、いったいど

館・県立近代美術館・県立琵琶湖文化館が合同で企画した本展では、3館の所蔵作品が、ゆかりの地・草津で一堂に会します。

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円
休館日：4月15日（月）・22日（月）、5月7日（火）

■講演会

「横井金谷筆「洛東春興図」の修理について」
4月21日（日）午後2時～3時30分

講師：伊藤清人氏（桃陽光堂 代表取締役）
大原由佳子（滋賀県立近代美術館 学芸員）

会場：太田酒造株式会社蔵蔵2F（草津市草津三丁目）

定員：80名（当日受付）

参加費：無料

■ギャラリートーク（担当学芸員による展示解説）

4月28日（日）午後2時～2時45分

■子ども向けワークショップ

「たいけんびじゅつかん×草津宿みちくさラボ」
「ミニチュア屏風をつくろう！」

5月11日（土）午前11時30分～3時30分

講師：伊藤清人氏（桃陽光堂代表取締役）
滋賀県立近代美術館スタッフ

対象：小学1年生から中学3年生とその保護者
定員：15名 材料費：一人500円

会場：（鑑賞）草津市立草津宿街道交流館

（制作）草津市立草津アミカホール 文化教室2
申込締切：4月26日（金）必着

お申し込み方法：

以下のいずれかの方法でお申し込みください。
[インターネット] 滋賀県立近代美術館ホームページの申し込みフォームから。

[往復はがき] 以下の項目を明記してください。
保護者をふくめ参加希望者全員の氏名（ふりがな）・学年・郵便番号・住所・電話番号・ファックス番号（お持ちの場合）・希望材料数

宛先：滋賀県立近代美術館

〒520-0807 滋賀県大津市松本1-2-1
大津合同庁舎5F

滋賀県立近代美術館「たいけんびじゅつかん」係
お問い合わせ先：TEL 077 (522) 2111（滋賀県立近代美術館）

細川正廣コレクション寄贈記念展
近江のやきものの魅力

開催中～ 6月9日（日）
滋賀県立陶芸の森

細川正廣コレクションは、大津市在住の

企画展

琵琶湖 漁具図鑑

—魚つかみの道具のヒミツ—

開催中～ 5月6日（月）
滋賀県立琵琶湖博物館



エビタツベ

2018年3月に国の登録有形民俗文化財となった琵琶湖博物館所蔵の「琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具」をお披露目します。エビタツベ、ドジョウ踏み、藻とりマンガなど、伝統漁具の実物資料に加えて、道具を使いこなす人々の戦略や、人と生きものとの駆け引きなどをパネルで解説し、湖辺の暮らしを支えた「魚つかみ」の道具の魅力を伝えます。

観覧料：常設展示観覧券が必要

休館日：月曜日（祝日の場合は開館）

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

滋賀県立近代美術館県内移動展示事業

春季展 旅する画僧・金谷
—近江が生んだ奇才—

開催中～ 5月12日（日）
草津市立草津宿街道交流館



「洛東春興図」（部分）
（滋賀県立近代美術館蔵）

現在の草津市に生まれた湖国滋賀を代表する絵師、横井金谷（1761～1832）は、大坂、江戸、京都、名古屋と各地を転々とする中で、あるときは謹厳な僧侶として人々を救済し、あるときは破戒僧として悪所に通い、あるときは山伏として大峰入りし、またあるときは絵師として筆を執りました。草津宿街道交流



北近江の戦国 小谷山古城

ようの
丁野永正 著

B6判並製本 総286頁 頒価1000円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

小谷城の麓にある丁野郷(長浜市)を父方のルーツとする著者が、ふるさとの歴史を散策。第Ⅰ部 丁野郷という村里誕生／第Ⅱ部 京極氏と浅井氏三代の興亡／第Ⅲ部 短編小説 戦国秘話「丁野山城」(2018.12.10刊)



近江石佛事典 I 近江湖南編

卯田 明 著

B5判上製本 総452頁 頒価1万円

問合先 草津市野村町八丁目2-23(著者)

「石造美術」研究の草分けとして知られる川勝政太郎の指導を受けた著者が、大津市から野洲市にかけての石造物の場所、刻まれている銘、大きさなどを写真入りで集成。(2019.3.20刊)

雨森芳洲生誕350年記念
芳洲まちづくりの歩み

雨森自治会 編

B5判並製本 総104頁 非売品

問合先 長浜市高月町雨森自治会(発行元)

江戸時代の国際人として知られる雨森芳洲の顕彰活動は大正10年頃から始まった。県・郡・町・芳洲会などさまざまなレベルで展開されてきた活動のあゆみ。(2019.1刊)

書店
にて
発売中

横光利一と大津

河瀬文太郎 著

B6判並製本 総178頁 1800円+税

新感覚派として川端康成と並び称された横光利一は、技師であった父親の仕事の関係で小学校時代を大津で過ごし、その後も幾度か逗留した。現在では記念碑の類も一切存在しない大津の地と作家横光との関係を探る。



福島克彦著『(仮)明智光秀と近江・丹波』発刊記念

講演会 明智光秀の素顔に迫る

5月11日(土) 午後2時～3時30分(開場1時30分)

次期NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公となる明智光秀は、織田武將として滋賀郡一帯を支配した近江とも関わりの深い人物です。光秀が琵琶湖に面して築いた坂本城と城下町、地元土豪などとの関係を残された文書から解説していただきます。



講師 福島克彦氏(淡海文庫『(仮)明智光秀と近江・丹波』著者・大山崎町歴史資料館館長)

会場 西教寺 研修道場「慈光の間」(大津市下阪本五丁目)

参加費 500円(資料代、拝観料500円は別途要)

定員 90名(申込先着順)

申し込み方法 電話・FAX・メールにて下記まで、お名前・郵便番号・ご住所・お電話番号をお知らせください。

申し込み先 TEL 0749 (22) 0627 / FAX 0749 (23) 7720
e-mail: info@sunrise-pub.co.jp (サンライズ出版 担当: 竹内)

第3回「ここまでわかった!安土城下町」

5月26日(日) 午後1時30分～3時

講師: 坂田孝彦氏(近江八幡市文化観光課)

会場: 当館NPSセミナールーム

定員: 140名(当日受付午後1時～ 先着順)

参加費: 200円(各回)

■城郭探訪

「安土城を歩く」

5月18日(土)

案内: 当館学芸員 場所: 当館・安土城跡

お申し込み方法:

要予約(電話・4月18日(木)から受付開始)

参加費: 1500円(入館料・入山料込み)

定員: 20名(申込先着順)

「観音寺城を歩く」

5月25日(土)

案内: 当館学芸員 場所: 当館・観音寺城跡

お申し込み方法:

要予約(電話・4月25日(木)から受付開始)

参加費: 2000円(入館料・入山料込み)

定員: 10名(申込先着順)

お問い合わせ先: TEL 0748 (46) 2424



これまでのことがわかっているのか、どのような課題があるのかを紹介します。

入館料: 大人890円、高大生630円、小中生410円

休館日: 5月7日(火)・13日(月)・20日(月)・27日(月)、6月3日(月)

■特別展記念講演会

「安土城—天下人の御所の系譜から—」

5月12日(日) 午後1時30分～3時

講師: 藤田達生氏(三重大学教授)

会場: 当館NPSセミナールーム

定員: 140名(当日受付午後1時～ 先着順)

参加費: 500円

■特別展開連博物館講座

第1回「ここまでわかった!安土城

—文献資料編—」

4月28日(日) 午後1時30分～3時

講師: 松下 浩氏(滋賀県教育委員会)

第2回「ここまでわかった!安土城

—発掘編—」

5月5日(日) 午後1時30分～3時

講師: 仲川 靖氏(滋賀県教育委員会)



琵琶湖博物館ブックレット9 比叢湖博物館の秘密を探る

前畑政善 著
A5判並製本 総128頁 1500円＋税

瀬田川に近い南湖における比叢湖博物館の繁殖行動を観察しつづけた著者が、琵琶湖の水位変動を引きがねとして深夜行われる繁殖行動を中心に、その知られざる生態を紹介。



淡海文庫62 水と祈りの近江を歩く

加藤賢治 著
B6判並製本 総192頁 1500円＋税

琵琶湖を有する滋賀県下の祭りや年中行事、民間信仰、伝承の現場を訪ね歩き、その歴史や風土との関わりを考察。根底に流れる草木園土悉皆成仏の思想も取り上げ、未来へとつなぐ現代版「近江の歴史風土記」。

近江の小倉百人一首

いかいゆり子 著

A5判並製本 総296頁 2000円＋税

かるたで親しまれる「小倉百人一首」収録歌のうち、滋賀県ゆかりの歌29首を解説し、関連地や歌碑、作者の墓など50ヶ所を地図付きで紹介した文学散歩。白洲正子や田辺聖子による解釈も引用しながら紹介する。



別冊淡海文庫26 栗東市の左義長からみる地域社会

笠井賢紀 著

B6判並製本 総204頁 1800円＋税

都市化が進むなか、今も左義長（どんど）行事がみられる滋賀県栗東市で、個人に対する生活史調査と全自治会に対するアンケート調査を実施、民俗学の知見も活かし、社会学の観点から、左義長の意味と役割を考察する。



あの日を忘れない —語り継ぎたい戦争の記憶—

土川まどか 著
B5判並製本 総150頁 1200円＋税

滋賀県長浜市在住の90歳前後の高齢者14人からそれぞれの体験を聞き取り、地方の少年・少女の日常にも必ず戦争が影を落としていた当時を、語り言葉そのままに記録。



別冊淡海文庫27 朝鮮通信使と彦根 —記録に残る井伊家のおもてなし—

野田浩子 著
B6判並製本 総174頁 1800円＋税

朝鮮通信使一行の公式記録に、くり返し彦根に対する称賛が記されていることは、あまり知られていない。初紹介史料も用い、「陸路中の第一」と讃えられた日朝交流の具体像に迫る。

伝統産業の製品開発戦略

—滋賀県彦根市 井上仏壇店の事例研究—

大橋松貴 著

A5判上製本 総168頁 2800円＋税

工部七職と呼ばれる7つの製造工程に分類化されている彦根仏壇。それぞれの製造技術を活かした創作仏壇や新たな製品開発の取り組みをマネジメントの側面から調査・研究。



多賀の本1 多賀道と御代参街道 —多賀信仰のひろがり—

多賀町史編纂を考える委員会 編
B5判並製本 総72頁 1500円＋税

延命長寿を願って多くの人々が多賀大社に参詣した多賀道と、江戸時代に整備された伊勢と多賀を結ぶ御代参街道のルートを、明治時代の地図を元にたどる。



表紙写真 滋賀県立琵琶湖博物館の樹冠トレイル
担当学芸員の林竜馬さん（4ページ参照）

編集後記 取材は3月上旬のまだ肌寒い時期でした。樹冠トレイルを取り囲む木々の緑はもっと増えているはず。「おとなのディスカバリー」のいろいろな毛皮がさわれるコーナーにて、中村学芸員に「意外に気持ちいいのがヌートリアです」と教わり、さわってみると、なぜ始めた手が止まらない。日本では、戦時中に軍隊の防寒服用に養殖が始まったのだとか。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先